

「富山人とは石川県民はあんまり話をしないよ」。金沢育ちの私の同期社員は私が所属していた部署の富山県出身のある男性を毛嫌いしてそう言った。

彼は富山大学の薬学部卒で「頭がいい」と評判だったが多くのスタッフは「頭はいいけれどイヤだ」というニュアンスを含んで彼を評価していた。

なぜなら強引で押しが強すぎたから。

私の金沢育ちの友人がいうには「富山人は商売上手で打算的で礼儀知らずだから」と言っていたがそれも彼女の極論で私から見れば彼女のふるまいも礼儀ばかりで中身がなく、文化人ぶってそうでない人々を馬鹿にするきらいがあった。

富山人は野心家が多いそうだが彼もそうであった。直属の上司である課長は高卒だった。

仕事の説明をいくらしても「理解できない」と一刀両断で上司の課長を飛びこしていきなり部長と仕事をすすめ「社長賞」を獲得し意気揚々と社内を闊歩かっほしていた。

おもしろくないのが課長だ。下を向いてはぶつぶつと彼の悪口を言い続けた。

彼は坂本龍馬が大好きで机の上に龍馬の写真を置き、いつも眺めていた。一六〇センチに満たないおチビさんであったが胸を張って闊歩している姿はエネルギーギッシユであった。

少々強引ではあったが私は彼に魅力を感じていた。彼のハートはいつも炎の

ように燃えていて、「いっちょやったるでー」的気概が感じられたからだ。

私が彼に好意を持ったのは子供の頃、我が家に年に数回程やってきた「富山の薬売りのおじさん」の独得な富山弁とイントネーションをなつかしく思い出させてくれたからかもしれない。

私が小学生だった昭和四十年代初め、閑静な東京世田谷の住宅地に突如現れた「薬売り」の姿は正に異次元からやってきた旅人のようであった。ハンチングのような帽子をかぶりたくさん引出しのある木箱をよっころしよと、玄関におろすと、その箱の引き出しをあけたり閉めたりしながら和紙で包まれた様々な薬を取り出しては家族の健康状態をきく。日頃は他人を信用せずにくくに人とは口もきかない母もおじさんとはとても親しげであった。

胃腸の弱い祖母、心臓の弱い祖父、アルコールの過ぎる父、そしてぜんそくぎみの私。

何でこんなに家族のことを知っているの？　そしていつも不きげんな母までさも嬉しげに話し続けて……「彼はきつと予知能力にたけた宇宙人だ」私はそんなことを思っていた。

そしてミッションが終わり彼がふしぎな木箱と共に玄関からいなくなると全く見たこともなく、子供には読めない「反魂丹」などのむずかしい字の袋が残され彼の演出した異次元空間が瞬時に消えさる。

ある日、私は意を決して母に尋ねた。

「あのおじさんは誰？」

すると母は「富山の薬売りのおじさんよ、もう二十年くらいになるかしら、お母さんが娘時代から来てくれてなくなった薬を補充してくれるの」と言った。

訪問販売ときいただけで子供でも「うさんくささ」を感じるのに、ましてや薬、

命にかかわる物なのに母は彼を一〇〇%信じ信頼している。

「あのおじさんは普通の行商人とは全く違うのだ。だからあのだくさん引出しのついた箱もきつと、ミラクルボックスなのだ」と子供心にも思ったものだ。

さてそれはさておき私のOL時代と野心家の同僚へと話をもどそう。

私が地味にコピーや裏方作業で一日を忙殺される中、社長賞の彼は会社の花形であった。「社長賞」を機に社長を含む重役たちの注目をあび海外との契約の仕事をもとめるためイタリア、フランスへと出張の日々。

私は内心、おもしろくなかった。俗に言う嫉妬であった。そして課長も他の社員も皆、尊敬というより同じ感情で彼をみつめていたようだ。

二十五歳の頃、会社を辞めた。親の紹介でもっと仕事の楽なみなし公務員となったのだ。

そこはA省の関連団体で病院経営など公務員の福利厚生を行っていた。十年程勤めの中堅職員となり職場の信頼も得られたある昼下がり、食堂で遅い昼食を取っていると、ズカズカと人気も少なくなった食堂に入ってきてキョロキョロとなるようにそこかしこ観察する男がいる。

背の低い、がにまたの、でも妙に躍動的な男をちらりと見やると、何と前の会社の同僚だった富山県人の彼だった。

「えっ！ 何でこんなところにいるの？」と私が絶叫すると、彼もアングリと大口をあけて「サッチャン？」と私の名を呼んだ。

「アンタこそ何で？」と彼も返して奇遇に驚きながらこの十年間のいきさつを打ち明けあった。

彼も前の会社で社長に可愛がられトントン拍子に出世したがある日社内クォーターで社長が失脚、彼の境遇も一変、結局、会社を辞め、富山の製薬会社に再

就職したそうだ。

そして公務員向けの病院を全国にいくつも持つこの団体への売り込みを開始すべく調査にきたらしい。

話の途中から彼は私をターゲットの至近距離に見つけたことで目はギラギラ、まるで魚を丸飲みするピラニアみたいになってきた。

彼の標的とする病院は都内の一等地にある大病院、私も仕事上、病院職員とも交流があった。

彼はその病院の担当者の性格、周辺環境病院設備等をきき出しきびすを返してすぐその病院の担当者の元へあいさつに行くという。

帰りぎわ「アンタ、会社にいた頃よりキレイになったやろ」と言って去っていった。

「もう三十六にもなるのにきれいなわけないじゃん、調子よいよ、このうそつき」と思いながらも嬉しかった。

のぼりとふろしき包みこそ背おっていないけれど彼はやっぱり平成の薬売りだった。

昔話をすることもなく風のように去っていくその後ろ姿をみて「頭が切れて働き者で過去をふり返らず前進する、少しもオセンチではないが人情はある、やっぱり富山人だ。私キライじゃないよ」と思ったものだ。

あれから三十年、彼は今でも令和の薬売りを続けているのであろうか。